

[No. 1] 次の記述のうち、正しいものはどれか。

1. 田畑輪換とは化学的雑草防除法の一つである。これは、水田状態と畑状態を交互に繰り返して行うものであり、多年生雑草に対する防除効果が高い。
2. 同一の農地に異なる種類の作物を短い間隔で続けて作付けすることを連作といい、イネ科やマメ科作物は比較的連作に強いものが多い。
3. 緑肥は植物体が腐る前に土壌中にすき込んで肥料とするものをいう。窒素含量に対する炭素含量の割合（C/N比）が高い緑肥作物をすき込んだ場合、一時的に窒素不足になることがある。
4. アイガモ農法は、生態的雑草防除法の一つである。これは、アイガモによる雑草の摂食や土壌のかく乱により雑草の繁茂を抑制する方法であり、一般に水稻の移植直後から水田にアイガモを放飼する。
5. クロタラリアは、休閑期に栽培することでウイルスの生息密度を低下させることができる植物として知られている。このような効果を持つ植物をカバープランツという。

[No. 2] 次の記述のうち、**誤っているもの**はどれか。

1. 施設栽培において、果菜類の収量を高めるための環境制御技術の中心になっているのが炭酸ガス施用技術である。
2. GAPとは、農業生産活動を行う上で必要な関係法令等の内容に則して定められる点検項目に沿って農業生産活動の各工程の正確な実施、記録、点検及び評価を行うことによる持続的な改善活動のことである。
3. 休眠状態が解除された種子が発芽するには、「温度（適温）、水分、酸素」が必要である。
4. 蒸散量が多くなりすぎると、気孔が閉鎖し、CO₂の葉内への取り込みが抑制されて光合成速度が低下する。
5. トウモロコシは肥料吸収力の弱い作物であるため、増収には多肥栽培が必要である。また、肥料吸収効率を高めるため、肥料が種子と接触するよう施肥する。

[No. 3] イネの品質・品種に関する次の記述のうち、**誤っているもの**はどれか。

1. 酒米は、正式には酒造好適米と呼ばれ、胚乳の中心部に心白という不透明な部分が発現する大粒の品種が多い。
2. 飼料用イネは家畜の飼料とするため外観は重視されないが、家畜が食欲を高めるため食味が重視される。また、多収を目的とするため、耐倒伏性の強い品種が求められる。
3. ササニシキは宮城県で育成され、食味は優れていたが、耐倒伏性、耐冷性が弱かったことから作付面積が減少した。
4. 日本で栽培されているイネの品種で最も多いのはコシヒカリであり、福井県で育成された。
5. 水田で栽培される水稻に対して畑で栽培されるイネには陸稲というものがある。

[No. 4] イネの栽培管理に関する次の記述の□に入る語句の組合せのうち、正しいものはどれか。

移植直後の苗は根が少ないので苗のしおれを防ぐほか、苗を保護するために、ある程度の□A管理にする。その後、最高分けつ期ごろに落水し田面を乾かすことで無効分けつの発生を抑える。

穂ばらみ期から出穂期にかけての開花時期は特に□Bを必要とする時期であり、この時期に□Bが不足すると□Cが発生する。

登熟が進んで穂が傾き始めたら、コンバイン作業を楽に実施するために落水時期を早めることが見られるが、できる限り□D落水することが重要である。

	A	B	C	D
1.	深水	肥料	不稔粒	早く
2.	深水	水	稲こうじ病	早く
3.	深水	水	不稔粒	遅く
4.	浅水	水	稲こうじ病	早く
5.	浅水	肥料	稲こうじ病	遅く

[No. 5] イネに関する次の記述のうち、**誤っているもの**はどれか。

1. イネは、おもに「日本型」「インド型」「ジャワ型」に分類される。ジャワ型は遺伝的にインド型に近く、現在でもインド型に分類されることが多い。一般に日本型はインド型に比べて耐暑性も耐冷性も弱く生育適温帯が少ない。
2. イネ品種の早晩性は、それぞれの品種が持つ基本栄養成長の長短と、感光性・感温性の大小とによって決まる。
3. ハイブリッドライスは、雑種強勢を利用して育成された多収など優れた特性を持つ品種で、中国では作付面積の50%以上を占めると言われている。
4. 玄米が変色したものを着色粒と呼び、このうちカメムシ類の吸汁痕が残ったものを斑点米という。
5. イネの省力・低コスト栽培を実現する技術として株間を大きく開ける疎植栽培が普及し始めている。温暖地の試験では株間18 cmを30 cmに広げても収量には大差ないことが報告されている。

[No. 6] ムギに関する次の記述のうち、正しいものはどれか。

1. コムギは、製粉したときのグルテン含有量と粉の性質によって用途が分かれ、グルテン含有量の多い小麦粉を薄力粉、少ないものをうどん粉という。
2. 国内においてムギは、過去には麦飯用などの食用として多く栽培されていたが、現在ではうどん用のみとなっている。
3. ムギの栽培には、乾燥に遭遇しても迅速に灌水対応できるよう灌水施設や水路が整っていて、地下水位の高い農地が望ましい。
4. コムギの香川県オリジナル品種である「さぬきの夢 2000」は「さぬきの夢 2009」が後継品種として育成されたことを契機に、県外においても栽培されるようになった。
5. ダイシモチは早生で倒伏に強いもち性の裸麦であり、成熟期の穂が紫色になるのが特徴である。

[No. 7] イモ類に関する次の記述のうち、**誤っているもの**はどれか。

1. サツマイモはヒルガオ科の植物で中南米が起源とされている。栽培では窒素が多いといわれる「つるぼけ」になり減収する。
2. ジャガイモの可食部分は茎が肥大したものであり「塊茎」と呼ばれる。
3. サトイモはサトイモ科サトイモ属の作物で、高温多湿を好み、葉や茎に多量の水分を蓄えるため土壌の乾燥に強い。
4. ジャガイモはナス科の植物であるので、ナスに似た花を咲かせ、実を付けることもある。
5. サツマイモの可食部分は根が肥大したものであり「塊根」と呼ばれる。

[No. 8] 工芸作物に関する次の説明として、**誤っているもの**はどれか。

1. テンサイはダイコンと同じアブラナ科の植物で、国内では主に北海道で栽培されており、国産砂糖原料の半分以上を占めていることから、砂糖大根ともよばれる。
2. サトウキビはイネ科サトウキビ属の多年生草本で光合成能力が高く、高い乾物生産性を有している。主に鹿児島県以南で栽培されており、連作が可能である。香川県では一般に栽培されるよりも細身の品種が栽培されており、和三盆の原料とされている。
3. チャはツバキ科に属する常緑木本であり、挿し木などの栄養繁殖で増やす。生葉を発酵させたものが紅茶やウーロン茶であり、発酵が進まないように生葉を摘採後すぐに加熱するのが緑茶である。
4. イグサは畳表や敷物の原料として栽培される水田作物である。全盛期には岡山県が主産地で香川県でも栽培されていたが、現在は九州が主産地となっている。
5. タバコ栽培では主茎頂端の花が開花した後に花梗部を切除する摘心（心止め）という作業を行い、ニコチン成分などを葉に蓄積させる作業を行う。

[No. 9] 果樹栽培に関する次の記述のうち、正しいものの組合せはどれか。

- A. 日本の果樹栽培で利用されている整枝法は、立木仕立てと棚仕立てに大別される。前者はミカン、モモ、カキなどで採用され、後者はブドウ、キウイフルーツなどのつる性果樹で採用されているほか、日本ナシでも台風による落下防止などのために採用されている。
- B. リンゴの普通栽培では、作業効率を高めるため主幹に結果枝を直接着生させて結実を図る細方紡錘形（スレンダースピンドル）などの樹形が採用されている。一方、わい性台木を用いたリンゴの密植栽培では成木期に開心自然形の樹形が採用されている。
- C. ブドウの無核果生産において、4倍体品種のデラウェアでは、1回目のジベレリン処理を満開時～満開3日後の花房に行い、無核果粒を形成させ、満開約10日後に2回目のジベレリン処理を果房に行い、果粒肥大を促進させるのが一般的である。
- D. 果樹の生理的落果には早期落果と後期落果がある。落果する果実数は後期落果より早期落果のほうが多い。早期落果の原因の一つに果実間の栄養的な競合があげられる。したがって生理的落果を防止するために摘蕾や摘花、幼果の摘果が行われる。

- 1. A, B
- 2. A, C
- 3. A, D
- 4. B, C
- 5. B, D

[No. 10] 野菜に関する次の記述のうち、誤っているものの組合せはどれか。

- A. キュウリは雌雄異花で虫媒による他家受粉である。しかし、単為結果性が強く、受粉・受精しなくても結実する。
- B. アスパラガスは雌雄異株の多年生植物であり、地下茎の先端にある鱗芽から発生する若茎が食用とされる。アスパラガスの栽培では一般に種子繁殖は行われず、株分けによる増殖が採用される。
- C. トマトの第1花房は第8～10節の節間につき、以降、3葉ごとに花房をつける。
- D. ナス科の野菜は短日条件下で開花が促進される短日植物がほとんどであり、目的とする収穫時期に応じて量的短日品種と質的短日品種を使い分けている。

- 1. A, B
- 2. A, C
- 3. A, D
- 4. B, C
- 5. B, D

[No. 11] 花きに関する次の記述のうち、誤っているものはどれか。

1. ポインセチアはメキシコ原産のトウダイグサ科の植物である。短日植物で、生育適温は15℃～30℃程度である。赤、白に着色する部分は花ではない。クリスマスフラワーとしての鉢花需要が多い。
2. トルコキキョウは北アメリカ原産のリンドウ科の植物である。花色は紫、白、黄色など豊富で様々な品種がある。
3. 宿根カスミソウはナデシコ科の植物である。主茎から次々に側枝を分枝し、小輪の花を数多くつける。切り花やドライフラワーとして利用される。
4. カーネーションはナデシコ科の宿根草である。切り花類において作付面積は大きくないが、キクに次いで出荷量が多い。本来、秋から冬に開花し、短日条件で開花が促進される短日植物であるが、園芸品種では四季咲きに品種改良されている。
5. 葉ボタンはキャベツと同じアブラナ科の植物であり、元々は食用として導入されたが、観賞用として改良されている。

[No. 12] 花きに関する次の記述の□に入る語句の組合せのうち、正しいものはどれか。

花きでは遺伝子組み換えによる品種改良がおこなわれており、□A由来の遺伝子を用いて既存の品種よりも青色に近い花色の□Bが作出され、市販されている。

□Cは、キク科の植物であり、主に花壇用として栽培されるが、土壌線虫の生育密度を下げる効果があることから、□Dとして利用される。

	A	B	C	D
1.	ペチュニア	カーネーション	マリーゴールド	コンパニオンプランツ
2.	ペチュニア	バラ	パンジー	コンパニオンプランツ
3.	ガーベラ	カーネーション	マリーゴールド	天敵
4.	パンジー	カーネーション	マリーゴールド	天敵
5.	ガーベラ	バラ	パンジー	天敵

[No. 13] 果樹に関する次の記述のうち、**誤っているもの**はどれか。

1. リンゴやナシなどのバラ科植物の果実で、果肉などの一部が水浸状になって半透明に見えることをみつ症状（みつ入り）という。リンゴのみつ症状は、日本では消費者に好まれる傾向があるが、みつ症状が進んだ果実は貯蔵には向かない。
2. 果実の選別には大きさや重さを基準とする階級選別と果皮色や傷の有無等の外観を基準とした等級選別がある。最近では果実の内部品質を非破壊で測定する技術として近赤外線を照射して糖度を測定する技術が開発・実用化されている。
3. キウイフルーツや洋ナシでは収穫後、一定期間貯蔵させる「追熟」という作業が行われる。
4. ジョイント仕立ては、温州ミカンで開発された最新の仕立て方で、主幹を長く伸ばした専用苗を用い、定植時に先端を隣の樹に接ぎ木してつなげる超早期成園化技術である。
5. 同じ種類の果樹を連作すると、生育不良となったり枯死したりすることがあり、これをいや地もしくは連作障害と呼び、土壌に生育抑制物質が蓄積したり、線虫類が根に寄生することなどが原因で発生することが知られており、イチジクやモモで発生しやすい。

[No. 14] 園芸作物と品種の組合せのうち、**誤っているもの**はどれか。

1. トマト：桃太郎、レッドオーレ、アイコ
2. 温州ミカン：宮川早生、小原紅早生、西村早生
3. イチゴ：さぬきひめ、女峰、とちおとめ
4. ブドウ：シャインマスカット、藤稔、瀬戸ジャイアンツ
5. カキ：愛宕、太秋、富有

[No. 15] 次の品種群のうち、かんきつ類の組合せはどれか。

1. なつたより、茂木、長崎早生
2. スイートスプリング、甘平、不知火
3. あきづき、愛宕、二十世紀
4. ちよひめ、清水白桃、あかつき
5. シナノゴールド、紅玉、ふじ

[No. 16] 次の記述のうち、**誤っているもの**はどれか。

1. トウモロコシなどの他殖性植物では、近交を何代も続けると旺盛さが著しく弱まり、収量や穂数などが世代とともに減少することを自殖弱勢という。
2. 自家不和合性とは、自分の花粉では受精せず、同種他個体の花粉（他家花粉）で受精する仕組みのことである。
3. 日本が中心になって取り組んだ国際イネゲノム塩基配列解読プロジェクト（IRGSP）により、2004年にコシヒカリの全ゲノム配列が解読された。
4. 栄養繁殖植物はウイルス病に弱く、一度ウイルスに罹患すると次の世代以降もウイルスを保有したまま栽培されてしまう。このため、サツマイモやジャガイモなどの栄養繁殖植物では茎頂培養などによるウイルスフリー苗が用いられている。
5. F₁品種は、雑種強勢により生育が旺盛で収量が増加するだけでなく、形質が揃うため大量生産・大量流通に適している。

[No. 17] 次の記述の□に入る語句の組合せのうち、正しいものはどれか。

育種とは、作物の種が有する□A□な遺伝変異を活用して目的にかなった遺伝的性能をもつ新しい品種を育成することである。

人間の改良によって育成されてきた□B□は、農業上の利点のみを追求するために、耐病虫性や環境ストレス耐性など環境に対するさまざまな適応性を□C□いることが多い。

□D□の法則は、遺伝学を発達させるきっかけとなる法則で1900年に再発見された。

- | | A | B | C | D |
|----|----|-----|-----|-------|
| 1. | 多様 | 栽培種 | 失って | メンデル |
| 2. | 多様 | 野生種 | 失って | ダーウィン |
| 3. | 多様 | 栽培種 | 備えて | メンデル |
| 4. | 均一 | 野生種 | 失って | ダーウィン |
| 5. | 均一 | 栽培種 | 備えて | メンデル |

[No. 18] 次の記述のうち、誤っているものはどれか。

1. イネのうるちともちは、Wx 遺伝子に支配される胚乳の特性であり、もちは劣性であるため、もちにうるちの花粉がかかるとうるちになる。
2. 育種は、変異の拡大、選抜、固定の3つの過程から成り立っている。
3. 系統育種法とは自殖性作物を主な対象とした交雑育種法である。
4. 自家受粉によって生じた個体群をクローンと呼び、突然変異が起こらない限り、遺伝的にヘテロのまま形質を維持することができる。
5. 育成された新品種は、種苗法に基づいて登録を行うことにより、育成者の権利が保護される。

[No. 19] 植物病害の防除に関する次の記述の□に入る語句の組合せのうち、正しいものはどれか。

土壌伝染病の防除には、ほ場の衛生管理が最も重要であり、罹病植物残渣の□ A □埋設や焼却処理が有効である。また、土壌くん蒸では薬害を回避するため、ガスが□ B □に植え付けを行う。

土壌消毒のうち、熱を利用したものには、土壌に熱水を直接灌水する□ C □や、地中に蒸気噴出管や加温装置を埋設する蒸気消毒法がある。

	A	B	C
1.	ほ場外での	抜けた後	熱水消毒法
2.	ほ場内での	抜けた後	温湯浸漬法
3.	ほ場外での	抜けないうち	温湯浸漬法
4.	ほ場内での	抜けないうち	熱水消毒法
5.	ほ場内での	抜けた後	熱水消毒法

[No. 20] 作物の病理に関する次の記述のうち、**誤っているものの組合せ**はどれか。

- A. 作物の伝染性の病気は、カビ、細菌、ウイルスなどを病原体とし、中でもカビの一種である糸状菌によるものが最も多い。
- B. 糸状菌による病気は、キュウリのうどんこ病など土壌伝染性のものやハクサイの根こぶ病など空気伝染性のものがある。
- C. べと病は空気や水から感染し、長雨など多湿の時に多くの野菜や草花に発生する。
- D. ウイルスは、きわめてごく小さな細胞構造を持つ病原体である。

- 1. A, B
- 2. A, C
- 3. A, D
- 4. B, C
- 5. B, D

[No. 21] 次のうち、水稻の病害で**ないもの**はどれか。

- 1. 内穎褐変病
- 2. 紋枯病
- 3. 赤星病
- 4. もみ枯細菌病
- 5. 縞葉枯病

[No. 22] 水稻の病害に関する次の記述の□に入る語句の組合せのうち、正しいものはどれか。

イネいもち病は、日本で最も被害が大きいイネの□A□である。苗化から出穂後までの様々な稲の生育ステージに感染し、発病する。分けつ期に葉に病斑が形成されると、次に発育する葉の葉鞘、上位の葉身、葉鞘が次々に□B□なる「ずりこみ」が起こる。本菌は屋内に貯蔵された被害わらや保菌籾で越冬する。品種に対応した□C□がある。

イネ萎縮病はウイルス病であり、□D□などによって永続伝搬され、イネに萎縮、分けつの増加を起こす。

A	B	C	D
1. 細菌病	長く	レース	ウンカ
2. 細菌病	短く	ウイルス	ツマグロヨコバイ
3. 細菌病	短く	レース	ウンカ
4. カビによる糸状菌病害	長く	ウイルス	ウンカ
5. カビによる糸状菌病害	短く	レース	ツマグロヨコバイ

[No. 23] 昆虫に関する次の記述のうち、次の記述の□に入る語句の組合せのうち、正しいものはどれか。

昆虫は体が「頭」「胸」「腹」の3つの部分に分かれている。□A□は、目や□B□などを備えており、感覚をつかさどる部分である。目は一般に、1対の□C□と3個の□D□があり、□C□は主に物体の形や色を識別し、□D□は、主に光を感受する役割を持っている。

A	B	C	D
1. 頭	マルピーギ管	単眼	複眼
2. 胸	マルピーギ管	複眼	複眼
3. 頭	マルピーギ管	複眼	単眼
4. 胸	触角	単眼	複眼
5. 頭	触角	複眼	単眼

[No. 24] 各種の害虫防除法に関する次の記述のうち、**誤っているもの**はどれか。

1. 総合的害虫管理とは害虫個体群の生息密度を低く維持するシステムであり、使用する防除技術として殺虫剤を使用することも排除していない。
2. 耕種的防除とは、栽培環境や栽培時期を変えたり、作物の種類、品種を適切に選んだりすることにより、害虫の被害を軽減しようとするものである。
3. 物理的防除のうち、特定の色に誘引される昆虫の性質を利用し、着色した粘着版を用いて害虫を誘引する方法が開発されている。
4. 天敵を用いた害虫防除を生物的防除法という。昆虫の病原微生物を製剤化した生物農薬が商品化されているが、生物的防除には該当しない。
5. 特殊な防除法として性フェロモン活用や強力な化学物質による誘引、放射線を利用した不妊虫放飼があり、沖縄県ではウリミバエの不妊虫放飼が今でも行われている。

[No. 25] 化学農薬に関する次の記述のうち、**誤っているものの組合せ**はどれか。

- A. ネオニコチノイド系殺虫剤は、様々な昆虫に対して殺虫効果を発揮するが、カメムシ目昆虫には効果が低いことが確認されている。
- B. 有機リン系殺虫剤は酵素活性を阻害し、神経伝達物質であるアセチルコリンが分解されず過剰となり、神経の異常興奮を引き起こして昆虫は死に至る。
- C. ピレスロイド系殺虫剤は速効性であり、光や酸素で速やかに分解されるため残効性が低い。哺乳類に対して毒性を発揮しないことから、広く利用されている。
- D. 昆虫成長制御剤は、昆虫の卵や幼虫に対して作用し、正常な脱皮や変態を進行させず、死滅させる。哺乳類に対しても強い毒性を持ち、日本では製造が認められていない。

1. A, B
2. A, C
3. A, D
4. B, C
5. B, D

[No. 26] 害虫とその防除に関する次の記述の□に入る語句の組合せのうち、正しいものはどれか。

アブラムシは果樹や野菜などの□A□であり、ウイルスを媒介する。ナミテントウやナナホシテントウはアブラムシ□B□する昆虫である。

□C□は草食性の昆虫であり、ナスやジャガイモの葉などを加害する害虫である。ナミテントウやナナホシテントウと混同されることからテントウムシダマシと称されることも多い。

	A	B	C
1.	益虫	と共生	キイロテントウ
2.	益虫	と共生	ニジュウヤホシテントウ
3.	害虫	と共生	キイロテントウ
4.	害虫	を捕食	ニジュウヤホシテントウ
5.	害虫	を捕食	キイロテントウ

[No. 27] 昆虫の利用に関する次の記述のうち、正しいものはどれか。

1. トマトやナスのハウス栽培において花粉媒介には、セイヨウミツバチの使用が最も多い。
2. セイヨウオオマルハナバチは多くの作物の花粉媒介に利用されており、経済的な観点から特定外来生物から除外されている。
3. 日本における商業的な養蜂では、その大部分で日本ミツバチが使用されている。
4. イチゴの施設栽培で問題となるハダニ類に対する天敵農薬として、スワルスキーカブリダニやリモニカスカブリダニの利用が広がっている。
5. 養蚕はカイコを飼育し、繭から生糸をつくる産業である。日本に伝わったのは弥生時代とも言われ、20世紀の前半には隆盛を極めたが、現在は大きく衰退している。

[No. 28] 土壌に関する次の記述のうち、**誤っているもの**はどれか。

1. 土壌中には、大気中に存在する窒素ガスを固定する能力を持つ微生物が存在している。
2. 不良水田の一つに老朽化水田があり、作期の後半に下葉の枯れ上りが多くなる「秋落ち」現象が見られる。
3. 土壌が団粒構造を取ると孔隙率が高くなり、土壌が乾燥しやすくなるので、植物の生育には好ましくない。
4. 肥料成分をゆっくりと放出するタイプの肥料は、肥効調節型肥料という。
5. 固相、液相、気相の3つを合わせて土壌の三相構造という。

[No. 29] 植物の生理に関する次の記述のうち、に入る語句の組合せのうち、正しいものはどれか。

A とは葉緑体の中で B のエネルギーを使って空気中の CO_2 と根から吸収した H_2O とを合成して自らの栄養源となる C を作り出すことをいう。

植物は D を行っており、体内に酸素を取り込んで C などを分解し、生物が体を維持・成長するのに必要な生命活動エネルギーを取り出す。

	A	B	C	D
1.	光合成	光	タンパク質	吸水
2.	光合成	光	炭水化物	呼吸
3.	光合成	大気中	タンパク質	呼吸
4.	呼吸	光	炭水化物	光合成
5.	呼吸	大気中	タンパク質	光合成

[No. 30] 畜産と畜産物に関する次の記述のうち、**誤っているものの組合せ**はどれか。

- A. 人工授精とは雄性動物の精巣から精子を採取し、その精子を人為的に雌性動物の生殖器内に注入することにより妊娠を成立させ、子を得る技術であり、家畜では豚が最も広く普及しており、日本で繁殖される豚のほとんどが人工授精によるものである。
- B. 牧草にはイネ科ではチモシーやイタリアンライグラス、マメ科ではクローバーやアルファルファなどがある。
- C. 牛乳の主要成分は脂質、たんぱく質、炭水化物、無機質である。牛乳に含まれる炭水化物のうち、主要な成分はラクトースである。
- D. 日本では、と畜場において「アニマルウェルフェア(動物福祉)」の基本的な考え方にに基づき、家畜の5つの自由を保障することが義務付けられている。

- 1. A, B
- 2. A, C
- 3. A, D
- 4. B, C
- 5. B, D

[No. 31] 家畜の栄養に関する説明として、**誤っているもの**はどれか。

1. 豚などの単胃動物では、たんぱく質は酢酸に分解されて吸収される。
2. 牛などの反芻動物では、たんぱく質は第1胃と第2胃内の微生物によってアミノ酸などに分解される。
3. 動物体内でのタンパク質合成に必要なアミノ酸において、体内で合成できず飼料から摂取しなければならないものを、必須アミノ酸という。
4. 牛は、ルーメン微生物がすべての種類のアミノ酸を合成できる。
5. ホールクロップサイレージ (WCS) は、飼料作物の茎葉や子実をサイロや容器に詰め込んだり、ロール状にしたものをラップでくるむなどして、発酵させたものである。

[No. 32] 家畜の疾病に関する次の記述の□に入る語句の組合せのうち、正しいものはどれか。

□A□ は、□B□ に高い致死性を示す。感染した野鳥、汚染された排泄物や粉じんなどを介して伝播する。日本では□C□ や□D□ の摂取によるヒトへの感染例は報告されていない。

	A	B	C	D
1.	高病原性鳥インフルエンザ	家禽	鶏卵	鶏肉
2.	口蹄疫	家禽	牛肉	牛乳
3.	高病原性鳥インフルエンザ	奇蹄類	鴨肉	鶏肉
4.	口蹄疫	奇蹄類	牛肉	牛乳
5.	高病原性鳥インフルエンザ	偶蹄類	鶏卵	鶏肉

[No. 33] 香川県の農業に関する次の記述のうち、**誤っているもの**はどれか。

1. 香川県における農業産出額は、平成9年以降1,000億円を下回っている。
2. 香川県における農業産出額の約3割は、野菜が占めている。
3. 香川県の特産品であるオリーブは、作付面積、生産量ともに全国順位1位である。(平成29年)
4. 香川県の水田比率は全国に比べて高く、80%を超えており、全国順位は7位(令和2年)であることなどから、米の農業産出額が畜産や野菜などと比べて多いのが特徴である。
5. 畜産に分類される家畜のうち、農業産出額が最も多いのは鶏である。

[No. 34] 香川県の農業に関する次の記述の□に入る語句の組合せのうち、正しいものはどれか。

農家数は一貫して減少傾向であり、平成7年に53,000戸を超えていた農家数は、20年後の平成27年には□A□戸を超える程度となっている。また、減少幅が大きいのは、□B□である。

一方、経営規模の大きい農家数は増加の傾向を示しており、□C□ヘクタール以上経営耕地を持つ農家数は、平成7年の33戸から平成27年には165戸となっている。

	A	B	C
1.	35,000	自給的農家	5
2.	15,000	自給的農家	5
3.	35,000	販売農家	5
4.	15,000	販売農家	50
5.	35,000	販売農家	50

[No. 35] 農業経済に関する次の記述のうち、誤っているものはどれか。

1. 農家総所得とは、農業所得・農業生産関連事業所得・農外所得・年金等の収入の合計である。
2. 農業所得とは、農業粗収益から、農業経営費を差し引いた金額で、1年間の経営活動がもたらした新たな経済価値のことである。
3. 農業粗収益とは、1年間の農業経営活動で得られた生産物・中間生産物・副産物を金額で示した経済価値のことである。
4. 農業経営費とは、農業粗収益をあげるために消費した生産要素の費用であり、物財費・雇用労賃・支払地代・支払利息・家計費の合計である。
5. 6次産業化とは、農業を1次産業としてだけでなく、加工などの2次産業、サービス業や販売などの3次産業まで含め、一体化した産業として農業の可能性を広げようとするものである。

[No. 36] 牛乳及び乳製品に関する次の記述のうち、に入る語句の組合せのうち、正しいものはどれか。

「牛乳」とは、生乳（牛から搾ったままの乳）を加熱殺菌したものであり、原料は生乳のみで、水や他の原料を加えたり、成分を減らすことはできない。また、乳脂肪分A以上、無脂乳固形分B以上含んでいることが条件づけられている。

「加工乳」とは、生乳にバターや脱脂粉乳など他の乳製品を添加して、成分を調整したものであり、加えてもよいのは乳製品と水にC。今では乳成分を濃くした濃厚タイプや低脂肪タイプのもなど、様々な製品が製造されている。

	A	B	C
1.	3.0%	3.0%	限られている
2.	3.0%	10.0%	限られていない
3.	3.0%	8.0%	限られている
4.	5.0%	5.0%	限られている
5.	5.0%	8.0%	限られていない

[No. 37] 「HACCP」に関する次の記述のうち、正しいものはどれか。

1. 「適正農業規範」と訳される農業、畜産、水産における生産工程管理である。
2. ISO が定めた国際的な食品に関する標準規格である。
3. 農業及び水産業における食品の採取業は HACCP に沿った衛生管理の対象外である。
4. 原則としてすべての食品等事業者が取り組まなくてはならない衛生管理のことであり、現在は移行措置の期間中で、東京オリンピック・パラリンピック終了後に完全施行されることとなっている。
5. 弁当やサンドイッチなどに表示されるもので、JAS と区別される。

[No. 38] 農業機械に関する次の記述のうち、**誤っているもの**はどれか。

1. ディーゼルエンジンは、構造的にスロットルバルブや点火プラグなどが不要である。
2. 刈り払い機やチェーンソーによく用いられるガソリンエンジンは、4サイクルである。
3. ディーゼル機関は、圧縮点火という特性から、ガソリン機関よりも一般に圧縮比が高い。
4. フォーレージハーベスタは、飼料作物の収穫作業を行う時に使用する農業機械である。
5. PTO とは、パワー・テイク・オフの略称である。

[No. 39] 農業機械に関する次の記述のうち、**誤っているもの**はどれか。

1. プラウを使用する際は、ほ場の抵抗が大きいので比較的馬力の大きいトラクタが必要である。
2. ホイル（車輪）型トラクタは、クローラ型トラクタに比べてけん引力が大きく、不整地や湿潤地での走行に適している。
3. マニユアスプレッダとは、たい肥を散布する機械のことである。
4. カルチベータは、中耕や除草に用いる機械の名称である。
5. スピードスプレーヤーとは農薬散布用の機械である。

[No. 40] 稲作の収穫に関する次の記述のうち、に入る語句の組合せのうち、正しいものはどれか。

コンバインは、走行しながら刈り取り、脱穀、選別を同時に行う収穫機械で、籾が付いた穂先の部分だけを脱穀部にかけるAと地際部から刈り取った稲体全体を脱穀部にかける普通コンバインとに分けられる。

Bは刈り取り、Cを行う収穫機械で、刈り取り後には天日による自然乾燥を行うことも多く、その後の作業や品質が天候に左右される。

	A	B	C
1.	自脱型コンバイン	バインダー	結束
2.	自脱型コンバイン	デバイダ	結束
3.	自脱型コンバイン	バインダー	脱穀
4.	汎用型コンバイン	バインダー	選別
5.	汎用型コンバイン	デバイダ	選別